法制史料集成

近世甲斐法制之研究（二）

「甲府の町火消と警火の制」

大久保治男

一　序にかえて ― 江戸の町火消制度概説
二　甲府の町火消制度総説
三　甲府の火消及び警火に関する古文書（年代順）　県立図書館所蔵
四　甲府の町火消に関する古文書　県立図書館所蔵
― 主として火消道具、人足、用水、夜番に関するもの ―
五　「甲府御用日記」「甲府御用留」―文政以降―中よりの関連条項の抜粋　県立図書館所蔵
六　甲府の町及び在の五人組帳の数編の中より火消、警火に関する条項の抜粋
七　参考史料、徳川禁令考、市中取締類集等からの火消警火に関する条項の抜粋

一

甲府の町火消の制度は、江戸の消防制度に準拠してつくられたものである。

江戸幕府の消防組織は、武家方に「定火消」「大名火消」があり、町方の「町火消」は、幕府の直轄ではないけれども、町奉行の監督に服し、府内民家の消防に従事するものである。町火消は、はじめ「店火消」と称し、一町内三十人の消防夫をおき家業の傍ら消防に従事していたが、それでは効果が薄く、又、度重る大火災の恐怖、防災の決意の結果、享保三年（一七一八）以降は、八代吉宗将軍の下、町奉行大岡忠相考案の所謂「いろは組」―一番より十番まで四十八組、別に本所、深川十六組―を総称するようになる。町火消は各組ごとに「頭取」があり、その下に「組頭」「纏」「纏持」「梯子持」「平人」「人足」などの階級があった。また町抱の鳶人足を使用することになる。これら消防夫の活躍の勢いはきわめて強く、任侠風をよそおい、いわゆる「江戸っ子」の典型といわれ「江戸の花」といわれる心意気が存した。町火消は最初、武家方の屋上へ纏を揚げることを禁ぜられたが、程なく事態緊急なだけに武家火消と打交りて何れの場所と雖も消防することとなる。その当時の町入用の過半以上は火消の入用であったそうで、いかに町内の防火に町人が意をそそいだかが看取せられる。消火道具も、破壊消防を主としたよ

うだが、明和元年、竜吐水が官給され、他に、梯子、刺俣、釣瓶、大溜竜、担竜、長鳶、大鳶などがあった。

因みに大坂では三代将軍家光が来阪したとき、惣年寄の指揮のもとに町火消が組織された。水にちなんで井、川、波、雨、滝の五つの纒を定め東西南北および町奉行の五組に使用させた。元禄年間制度を整備し、大阪郷を五区二十一番組に分け、各組で火消人足四百五十人とし、惣年寄の火災に対する役割も明確にした。以降、数度の改革がある。

註〔主要参考文献〕

松平太郎著「江戸時代制度の研究」
東陽堂編「江戸の花、上中下」
三田村鳶魚「江戸生活事典」
魚谷増男著「消防の歴史四百年」
石井良助編「徳川禁令考」

二

甲府の町火消制度は、江戸の制度に準拠したもので、万治三年（一六六〇）甲府町火消制度が制定されたのがはじめである。而して、其当時は、武家火消が主力であって、順次町火消に移り、城廓内八町を武家の手に委ね、廓外十三町が一般、町火消により、消防任務を果されたものと思われる。甲府略志によれば『万治三年、火災后、火消人足の制を定め、総町人足六百人を以四組に分け、平岡岡右衛門、野田庄右衛門（二人代官）竹川監物、渡辺弥兵衛（二人町奉行）の四人を組頭とし、各組三人づつの長人之に付属し、人足百五十人の定員を以火消組合を編成せり』―一五五頁―とあって、左の如き分担が定められている。

定

岡右衛門様御手へ付申分
伊勢町　佐右衛門　　伊勢町　忠兵衛
横近習町　喜右衛門

弐拾人　伊勢町　　弐拾人　横近習町
拾三人　金手町　　弐拾五人　上一条町
弐拾三人　下一条町　　拾壱人　城屋町
拾参人　和田平町　　拾五人　新紺屋町
弐人　古川尻町　　参人　古穴山町
壱人　古連雀町

梯子拾丁、人足弐拾人、つるべ五、人足五人、円座拾五、人足拾五人、とひ口廿五、人足廿五人、手桶七拾三、人足七拾三人、円座三、人足十二人
但まとひ、水くるま、添ちゃうちんのもん九曜星
〆　人足百五拾人

庄右衛門様御手に付申分
八日町　五左衛門　　柳町　八左衛門
立近習町　清右衛門

三拾弐人　柳町　　拾弐人　立近習町
弐拾壱人　片輪町　　弐拾弐人　西青沼町
弐拾人　西一条町　　拾弐人　細工町
拾弐人　　五人　上横沢町
拾人　鮎川町　　四人　古紺屋町
梯子拾丁、人足廿人、つるへ五、人足五人、円座十五、人足拾五人
とひ口廿五、人足廿五人、手桶七拾三、人足七拾三人、円座三、
人足拾弐人
但、まとひ、銀ふくべ、ちゃうちん添ちゃうちんのもんふくべ
〆、人足百五拾人

監物様御手に付申分
八日町　与一左衛門　　柳町　六右衛門
魚町　彦左衛門
弐拾四人　八日町　　弐拾人　魚町
九人　工町　　拾壱人　和田平新町
拾五人　鍛冶町　　拾八人　樋屋町
拾弐人　新青沼町　　六人　下横沢町
九人　古三日町　　三人　横田町
六人　広小路　　七人　白木町
七人　袋町　　三人　立町
梯子拾丁、人足廿人、つるへ五、人足五人、円座拾五、人足拾五人
とひ口廿五、人足廿五人、手桶七拾三、人足七拾三人、円座三、
人足拾弐人
但、まとひ、花わちがい、ちゃうちん添ちゃうちんのもん花輪違
〆、人足百五拾人

弥兵衛様御手に付申分
三日町　喜左衛門　　連雀町　半兵衛
穴山町　伝兵衛

三拾壱人　三日町　　三拾六人　連雀町
弐拾弐人　穴山町　　拾八人　川尻町
拾四人　古城屋町　　拾四人　古柳町
壱人　手こ町　　壱人　御崎町
弐人　八幡町　　三人　たたみ町
弐人　大工町　　六人　六方町
梯子拾丁、人足廿人、つるへ五、人足五人、円座拾五、人足拾五人
手樋七拾三、人足七拾三人、とひ口廿五、人足廿五人、円座三、
人足拾弐人
但、まとひ三かいひし、ちゃうちん添ちゃうちんのもん三かいひ
し、〆、人足、百五拾人

この時代は猶、甲府の町火消の形体は十分整備されたものではなかったが、天保年間（一八三〇～一八四三）連雀町の、内藤岩吉という者が、江戸から帰甲するや、整備せる江戸の町火消制度を更に移植し、江戸に全く倣って組織化した。城外十三町（曲輪外）の町役人と相談して、統制ある町火消を設立し、自ら、袢纏を調製して消防夫に領ち、江戸火消に倣った服装を整える等、凡てが江戸好みで江戸の町火消を範として造られた。当時、既に、華やかに発達を遂げた勇み肌の江戸の町火消を観て大いに意を動かされたのであろう。

註　〔主要参考文献〕

甲府略志、甲斐史、山梨県政七十年誌、山梨消防現勢
拙稿「甲府の町年寄」山梨県立女短大紀要第一巻

三

〔一〕甲府火消之書付の古文書のうち古いものに、弘治二年（一五五六）の「法度之意趣者」がある。

一当番之日限於テ其宿有盗賊は不撰貴賤貧富鳥目百疋可出之事
一同其宿中之失火者於テ自火者追放家主為賊之業焼失者可准右過怠之事
一夜廻番赦免家主雖有火賊之難番衆江不可懸其科之事　―以下略―

弘治弐年丙辰拾月十日

〔二〕天和元年（一六八一）『覚』

一御曲輪内者太鼓鐘打変可仕候
一御曲輪外御定之場所ノ内並竜率山方角ハ早太鼓打切リニ打セ可申候
一御定之場所近所並町続候分者太鼓二ツつなきニ打切リニ打モ可申候
一消鐘五ツ打セ可申候

右ハ御書付之通り出火之節柳沢帯刀様火之見御家ニ而御打セ被成候右之趣相心得罷在候様ニと被御渡候間此分留意組下借屋等迄相心得申様ニ可被申付候此書付印形之致留より御返し可有之候以上

坂田与市左衛門

酉二月十三日

〔三〕天和二年（一六八二）『覚』

一時分柄火之本之儀専一ニ致候はひ取之儀朝火事き付不○内ニ致候様ニ可申渡候殊ニ春之はらひの時分はひニ念入候様ニ可被申渡候○○○ニて○○たはこ○○候火又ハ店衆火鉢の儀晩々ニハ大屋々々江願之様ニ各々店ハ不及申組下江銘々被申渡べく候若持不参候輩ハ大屋より気付候様ニ可被申渡候此書付点つけ御廻し留より御返し可有之候以上　（○ハ虫）

坂田与市左衛門

戌十二月十二日

〔四〕天和三年（一六八三）『覚』

一火はちのさきニ屏風立へからす事
一火たつ棚に置く事無用ニ可仕事
一棚ニ而碁せうぎさすへからす事
一町中ニこやし置へからす事
一自身番夜番大切ニ可仕事
一奉公人衆へ慮外致へからすの事
一御城代様御通被遊候節ハ棚之者共手をつき可申候
一夜番あんどんあたらしくはり可申事
一町中馬方共をり可申事
一しよく人之事
一町御奉行所へ木たつゑつき申間敷事
一棚ニ而しきふとん無用之事

天和三年亥十二月二日

右之通上下町中へ相触候

〔五〕天和三年（一六八三）『覚』

一町中ニ而火事出来候は早速火本江かけつけ御両御奉行様江先御目ニかかり手くばり御意をうかかい候処ニ可被致候惣し而出合おそく候間其町其町之者共ニ急度可被申付候此書付ニ印判被致末より与一左衛門宅へ返し可被申候

亥十二月十三日

五味　五左衛門
坂田与一左衛門

長人衆
二十六名

〔六〕元禄七年（一六九四）令書中

一家持共はしごを作り置く事
一町中にごくもかりほしたき不申事
一町中裏屋に藁により積置事無用事

同年、町触に

一町々自身番に出候者時々柏子木を打候由時々柏子木は常々廻り夜番之者

に打せ自身番之者は半時々々に相廻り夜番之者油断不仕様可申付候勿論
自身番之者は半時之間にも度々相廻り諸事心を付用心厳敷可仕候

〔七〕宝永弐年（一七〇五）

『町中火消人足札改帳』

一弐拾四枚　三日町　一弐拾四枚　八日町
一拾七枚　下連雀町　一弐拾六枚　柳町
一拾弐枚　川尻町　一拾弐枚　片羽町
一九枚　鍛冶町　一拾五枚　桶屋町
一拾九枚　横近習町　一拾三枚　金手町
一弐拾枚　西青沼町　一弐拾枚　工町
一弐拾三枚　上一条町　一拾四枚　下一条町
一拾壱枚　上連雀町　一拾五枚　山田町
一弐拾枚　魚町　一七枚　立近習町
一拾七枚　和田平町　一拾四枚　穴山町
一拾八枚　西一条町　一四枚　元紺屋町
一拾三枚　愛宕町　一拾五枚　元城屋町
一拾四枚　元柳町　一四枚　広屋町
一四枚　横田町　一六枚　白木町
一弐枚　手子町　一弐枚　御崎町
一三枚　八幡町　一七枚　袋町
一六枚　広小路　一拾三枚　新青沼町
一八枚　城屋町　一弐枚　立町
一拾弐枚　新紺屋町　一壱枚　元連雀町
一拾枚　細工町　一壱枚　大工町
一六枚　久保町　一五枚　元穴山町
一五枚　上横沢町　一五枚　下横沢町
一九枚　元三日町　一七枚　相川町
一弐枚　元川尻町　一三枚　奥町
一拾八枚　境町

札数〆五百三拾七枚
右者出火之節ハ町中より罷出候人足如此ニ候以上
酉十月　秋山喜左衛門
大木太右衛門

宝永二年十月改

〔八〕享保十三年（一七二八）『触』

申十一月　被　仰渡連判帳
先達而茂申渡候通町中火之元随分入念候様ニ可申渡候此間は切ニ手あやまち有之様ニ相聞候無油断様ニ名主共江急度申渡しあやしき者有之候ハハ召捕可差出候町中自身番心かけ入念候様ニ可致候此段申渡候火之元之儀町中無油断急度可相触候
申十一月　丹波
若狭

〔九〕元文三年（一七三八）『定書』

郭内出火之節定書
一唯今迄消防之ため火事番定り在之候得共惣火之ために不罷成候ニ付向後相止メ候依之向寄消防組合少キ方ハ人数多相定候間右組合之内出火有之候ハハ何茂早速駈付消留メ大火ニ不罷成様ニ惣而申合置候様ニ可被致候事、
但組合之外ニ而も火元近所ニ而風並も悪敷候ハハ追手山ノ手江不及罷出防之心得たるへく候
一我等共両人ハ非番当番ニ無構追手江は民部少輔山之手ハ伊賀守罷出候火事向寄ニ而無之衆中ハ組頭中初勤番之面々共ニ屋敷向寄次第追手山之手江可被相詰候事
但組頭中ハ出火向寄ニ付或ハ当番或ハ防之場所江被出行而追手山之手一方明キ候事可在之候間両所江壱人宛被出候様被相心得重而可被申合置候
一〇〇追手山之手江罷出候ハハ見合火事場江罷出候事も可在之候追手山之手江罷詰候衆中よりも火事場江消防のため罷相越候様ニ差図いたし候事

可有之候間重而其旨可被相心得候事
一我等共月番ニ而無之方より火事消防之ためはしこ渋張手籠団等火事場江差出候様ニ可致候事
一屋舗近所出火之節ハ組合より早々駈付大火ニ不罷成様ニ可被致候場所江町火消罷越行ハハ打込ニ消防致常ニも火防之儀第一ニ仕諸事かさつ成儀無之様家来下々迄可被申付置候尤加勤与力并町方之者共江も其旨申付置候事
一郭外に出火在之郭内江も風並悪敷候ハハ防之ため右向寄組合之面々申合風並悪敷屋敷江集り防之心得たるへき事
一郭外に出火之節ハ我等共初郭内之面々ハ火事場江者不罷出候間郭内ニ准し組合之衆中申合早速駈付消留候様可被相心得事
右之通自今何茂被相心得間違不申候様益々申合置可被申候

八月　　建部民部少輔
　　永見　伊賀守

〔一〇〕寛保三年（一七四三）
『乍恐口上書を以奉願上候御事』
一当春中　御城於風上度々出火有之候処風茂無御座防能場所故大火ニ茂不罷成候然共風烈場所悪敷候て町人足斗ニ而ハ難防大火ニ茂及可申与奉存候対上府中之義ハ火消人足不足ニ御座候下府中より早速欠付候而茂間ニ合不申候甲斐守様御代ニは火消御役人被仰付町中御防被下候故火消人足茂多御座候処御料ニ罷成候而ハ町人足斗ニ而防益無心元奉存候ニ付近年町入用ニ而鳶之者拾壱人雇置為欠付申候故殊之外足りニ罷成候依之鳶之者数多仕度奉存弐三年以来町々ニ而相談仕候得共近年困窮仕候ニ付町中之力ニ及不申相談相究り不申候依之御入用を以上府中ニ六拾人下府中ニ四拾人鳶之者都合百人被　仰付被下置候様奉願候御慈悲ニ願之通被　仰付被下置候難有奉存候以上

寛保三年癸四月　　上府中
　　名主共

〔一一〕延享元年（一七四四）『証文』
差上申証文之事
一惣町中より差出候火消人足之儀今度御願申上古来より之出人足高九百八十八人出高を相減何百何十人相改丈夫成人足并火消道具等相改差出候ハ町之者共ハ先達而御願申上被　仰付候是亦惣町中一同ニお湯所無異論可相働候且亦此已後若相障義も於有之は古来之人数ニ可被　仰付候旨惣而於火事場喧嘩口論等堅相仕間敷候其町に之名主上組引廻し役人差図次第為相働可申候被　仰渡奉畏候若相背候は何分之曲事ニ茂可被　仰付為後日仍如件

延享元子年八月

〔一二〕延享元年（一七四四）『証文』
差出申候証文事
一今度欠付人足十三町ニ而参十人出火有候節早速欠付火防右決定被成候に付私共御請負仕出火の節早速も無間違候場所へ欠付御役人中様御指図次第火防可申候尤於右場所喧嘩口論一切仕間敷候金銀衣類は不及申軽キ器に至る迄拾ひ取申間敷候無拠相背候ハハ如何様の越度にも可被　仰付候且又御役人中様は勿論御名主中御意相背申候間敷候為後日連証文仍如件

延享元年子九月　　魚町請負人
大鳶職　　庄右衛門　印
　　外二十九名印

十三町中
御名主様

―山梨消防現勢　七頁―

〔一三〕宝暦二年（一七五二）『差出申一札之事』
一出火有之節御町年寄坂田与一左衛門殿江附罷出候人足前々より私共差出候所此度賃銀ニ而差出御雇人被下候様ニ御願申上候所御相談之上已来は御雇人被成可被下ニ付願之通賃銀ニ而差出候様ニ被　仰聞承知仕候尤町々火消人足賃銀之割合を以人足壱人ニ付壱ケ年四銀六〇ツツ差出可申候

自然此上賃銀ニ而差出相障候義も有之候ハハ前々之通人足ニ而差出可申
旨被　仰聞是又承知仕候依之一札差出申所仍如件
宝暦二年申正月
八日町壱丁目
市郎左衛門　印
他九名　印
奥村惣十郎殿

〔一四〕安永八年（一七七九）『覚』
一只今より風烈節ニ罷成候間火之元別而念ヲ入廉相無之様ニ可申付尤風吹候節は組頭両人宛相廻り火之元急度可申付
一府内出火之節者遠近不寄御定之通り人足御庫裏迄相詰可申候近隣出火之節ハ階子手籠近所より持寄早速防消可申候
一御年貢納籾十一月六日より同十五日迄ニ相納可申候其節御蔵場渋難ニ付無念之儀有之候而搗落し之濡籾等相納候ハハ重而差札相改納主江相廻し可申候皆御米と仕間敷候
一借屋出替之儀極月壱ヶ月は停止之事
一博奕之義従前之被　仰渡候通急度相守可申候以上
亥十月
右之趣可承知仕組下家持不及申地借店借等迄申渡拙者共方江印形取置申候依之印形差出申処仍如件
安永八年亥十月
組頭
源　七　印
惣　兵　衛　印
左郎右衛門　印
源　兵　衛　印
忠左衛門　印
吉左衛門　印
久左衛門　印
忠右衛門　印
吉　兵　衛　印
勘右衛門　印
宇　兵　衛　印
弥　兵　衛　印
藤左衛門　印
忠右衛門　印

〔一五〕寛政四年（一七九二）『触』
一町中天水桶地水桶不残様致吟味来ル十五日迄差出候様可被申付候東西之町々ハ北側江申合地水桶差出之南北之町ニは西側江差差出氷候ハハ折々取除候而水入置候之様可被申付候
一窺改之儀者例年之通各并上組共家別ニ相廻り入念銘々相改来ル十五日迄金左衛門方江可被相届候
一折々風立候節は火之元御気遣ニ被為思召候先達而被　仰渡候通自身番立番無断絶裏ニ迄相廻り火之元入念候様可被申付候風吹候節はくずもの類不焼様可被申付候木綿ふかし場ニ而煙草火鉢等差置候儀決而無用ニ可致旨是又可被申付候独身者私用ニ罷出候節は隣家江為相知留守之家内火之元心付候様可被申付候
右之通相触候様今日被　仰渡候間被得其意町内入念可被申付候此廻状被致印形無遅滞早々相廻し留より源三郎方江可被相返候以上
子十一月七日
坂田　源三郎
山本金左衛門

〔一六〕享和三年（一八〇三）『覚』
朱付札　享和三亥年甲府大火拝借金年賦返済、文化三年
覚
高金拾弐両之内
一金壱両弐朱
銀四両五分
此銭五百六文

右者去ル亥年類焼ニ付下連雀町鍛治町桶屋町工町金手町上一条町名主共拝借金拾ケ年賦上納当寅年之分返納書此之通請取候以上

十一月　　松平伊予守内

静吉弥四郎　印

坂田与一郎殿

〔一七〕文化三年（一八〇六）『掟』

火之元之掟

一火之元廉末ニ致し候もの早速地立店たて可申付事

一風烈之節は町々ニ而御用之外堅他出いたさす火之元窺相守り屋根上庇したミ等江水をうち有合之桶其外江水をくミため置申へき事

但屋根上之防之ためはしこ並水籠木鋺地等用意致し置可申候

一平日茂かたとハいふに不及二階物置等茂惣而目遠き場所ハたへす見廻り夜中ハ寝ふし候節家内を改消炭其外をとくとみととけ可申事

一湯屋をはしめ常に火を焚候渡世は猶更建具屋つき米やはかんなくすわら灰等并わら商売之もの其品別而こころ付可申事

一ふり挑灯ととなへ候品より度々致出火候儀有之候間用ひ候度こと入念しめし可申事

一普請小屋は昼夜無油断見廻其外河岸地物置等は別而心付可申事

一手あやまち致し火もへ立候ハハ零にておふひ消可申尤声をたて近所へしらせ可申事

一出火有之候ハハ屋根上其外飛火之防第一ニ可致己来遠方より之出火にて飛火いたしそれより焼つのり候ハハ火元と同罪たるへき事

一出火致し屋根上へもへぬけ又ハ飛火にてもへ立候節近所えものとも早速うちけし候ハハ其町内隣町より其ものともへ格別之褒美可遣事

但右出銀手当は地主とも并表店之ものにハ申合常々積置可申尤次第ニ寄月番之御番所江訴出可申時宣ニ寄褒美為取可申事

一火之番行事其町内を度々見廻り可申事

一風烈之節は名主茂支配内見廻り火之元おこたらさるよふ可申付事

一平日茂水溜桶用意いたし水かめかわかさる様たへすくミ入置可申事

一名主共組合之内弐三人ツツ申合常に支配内火之元等瓦ニ心付軒近き近江火所をこしらへ其外火之元不用心ニ相見候所ハ名主共見廻り為直可申事

右之条之急度可相守相背候ハハ罪科なるへきもの也

寅二月　　名主

〔一八〕年代不詳『触』

先達而申渡候通火之元随分可入念事

一盆中灯籠廉末ニ無之様可致事

一花火相撲杯堅停止之事

一夜番之儀増人を以前々之通可相心得事

右之通町中入念可相触者也

子七月　　出雲

因幡

〔一九〕年代不詳『覚』の抜粋

一風はけしき節ニ罷成候間火之元別而念入大切可仕候風吹候節は組頭両人衆夜中相廻り火之元可申付候事

一夜番之儀は常々申達候通り大切相勤可申候事

一家別ニはしご水籠所持ニ仕候事

一府内出火之節は遠近不寄人足前々之通り御裏理迄相詰可申候若近隣出火有之候ハハ組中不申及近所よりはしこ水籠持参り防消可申候事

〔二〇〕年代不詳『覚』

当三月廿三日夜八日町弐丁目より出火後町内騒々敷事共有之趣相聞候畢竟制方不行届如何之事ニ候向後心を配り町内穏ニ相成候様可致候

午五月

奉窺候覚

一当三月廿三日夜八日町弐丁目より出火後町内騒々敷事共有之趣相聞候畢竟私共制方不行届如何ニ被　思召候段被仰渡奉恐入候依之差扣可罷在哉此段奉窺候以上

午五月十三日　　山本金左衛門
　　坂田　与一郎

〔二一〕年代不詳

町中類焼家数江戸表江書上ケ

一本家合七百六拾壱軒
　此小間合四千十八間四尺四寸
借屋合九百五拾弐軒
土蔵合三拾三ケ所
寺合九ケ寺
脇寮合三拾八軒
本堂合三ケ所
小堂弐ケ所
社合四ケ所
神主屋敷壱軒
怪我人合八人男
死人合弐人　内　壱人男
　　壱人女
一本家弐拾三軒
借屋三拾三軒
右之通去極月類焼之節江戸表江書上候留如此御座候以上
　　四月十四日　　山本　金左衛門
　　坂田与一左衛門

四

〔二二〕文化十年（一八一三）『覚』
『出火場持道具水手人足書上帳』
文化十年酉十一月　　上府中

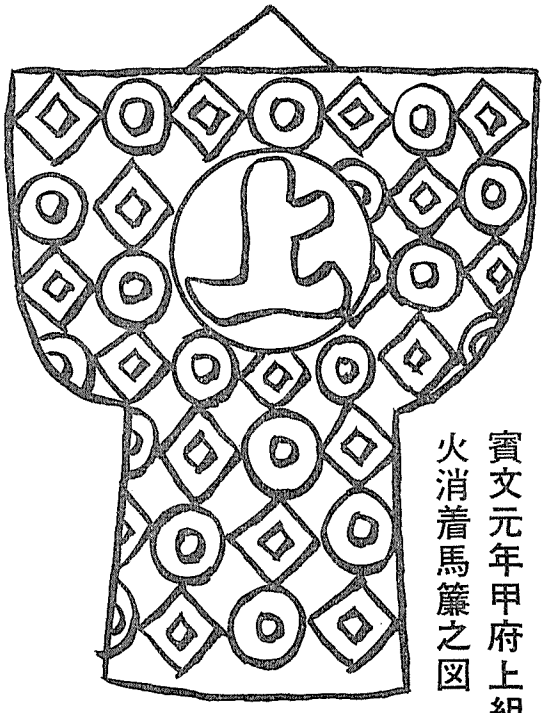
覚

上府中　鳶人足　拾五人
右持道具　纏　壱本
　纏挑灯　壱本
　階子　壱挺
　手鳶　拾本
　長鳶　壱本
　長熊手　弐本
　鳴はつひ
　　但蛇之目釘貫紋所丸ニ上之字

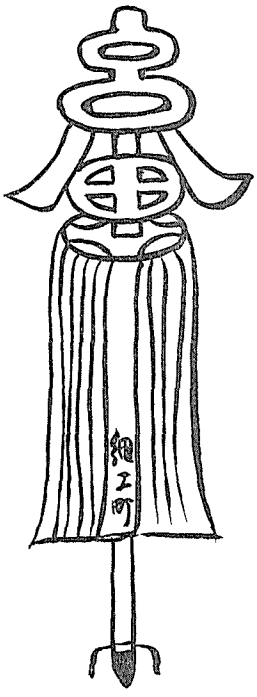
水手人足覚

一六人　愛宕町　　一弐人　元紺屋町
　内纏持　壱人　　内纏挑灯持　壱人
　纏挑灯持　壱人
一六人　新紺屋町　　一五人　細工町
　内纏持　壱人　　大工町
　纏挑灯持　壱人　　内纏持　壱人
一壱人　竪町　　纏挑灯持　壱人
　但纏挑灯持
　人足〆弐拾人　右五町竜吐水掛り
一七人　元城屋町　　一五人　元穴山町
　内纏挑灯持　壱人　　久保町
　御町年寄へ駈付四人　　内纏挑灯持　壱人
一四人　広庭町　　一七人　元柳町
　横田町　　内纏挑灯持　壱人
　元緑町
　右同断
一弐人　手子町　　一四人　元三日町

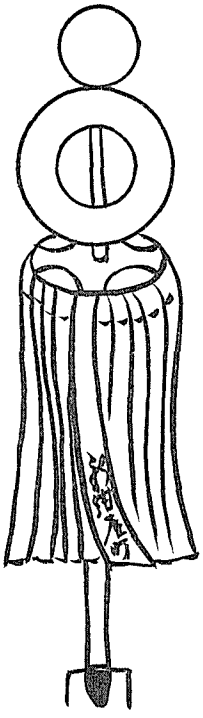
御崎町　内纏挑灯持　壱人
八幡町　郡司又右衛門様へ駈付弐人
内纏挑灯持　壱人
一弐人　上横沢町　一弐人　下横沢町
内纏挑灯持　壱人　右同断
一三人　相川町　一六人　新青沼町
右同断　右同断
一四人　広小路魚町　一三人　白木町
内竪町御見付駈付弐人
一三人　袋町
右四町組合持纏挑灯持壱人
人足〆五拾弐人
合七拾弐人
内弐人　竪町御見付へ駈付
弐人　郡司又右衛門様へ駈付
四人　御町年寄所へ駈付
拾六人　町々纏挑灯持
別而
四拾八人　水手人足
但　持物竜吐水壱柄
釣瓶弐ツ手鳶水桶
右持道具絵図



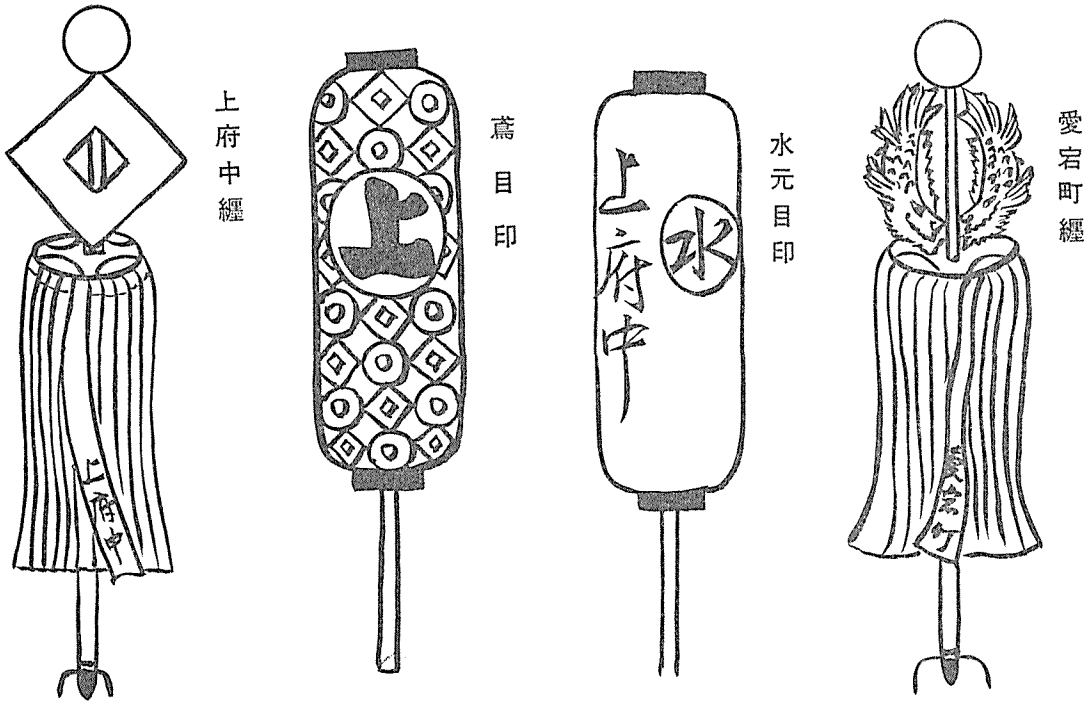
寶文元年甲府上組
火消着馬簾之図



細工町纏



新紺屋町纏



右者此度御尋ニ付出火場持道具水手人足書面之通ニ御座候以上

酉十一月　　上府中

御町年寄所

〔二三〕元治元年（一八六四）甲子五月

『八町組火消人足並諸道具内訳帳』

覚

一八町組抱鳶　　三拾人

一同　　五人

是は文久二戌年より八町出銀を以新規召抱申候

合三拾五人

但諸服鼠地紺松川菱股引鼠地紺ニ而のこれ筋

持道具

纏　　壱本

但軍配図扇ノ印

竜吐水　　壱挺

長鎌　　三挺

鳶口　　拾四挺

長熊手　　弐挺

手鳶　　五挺

手鎌　　五挺

刺扱大中小　　三挺

階子　　壱挺

右之品抱鳶人足共持出申候

一出人足高　　五拾人

此訳

一人足拾壱人　　柳町

纏　　壱人

柳ノ字ノ印但夜分ハ高張ニ替候

町年寄欠付　　五人

八日町口御門
御番所欠付　壱人
釣瓶持　壱人
水手　弐人
名主付　壱人
一人足七人　八日町
纏　壱人
八ノ字印　右同断
町年寄欠付　五人
名主付　壱人
一人足九人　三日町
纏　壱人
三蓋菱ノ印　右同断
八町組高罷持　壱人
水手　六人
名主付　壱人
一人足四人　山田町
纏　壱人
らの字印　右同断
階子持　弐人
名主付　壱人
一人足八人　穴山町
纏　壱人
穴山ノ印　右同断
竜吐水付高罷持　壱人
釣瓶持　壱人
水手　四人
名主付　壱人
一人足壱人　竪近習町
纏

蛇目違ノ印　右同断
名主付　壱人
一人足弐人　工町
町名幟持　壱人
名主附　壱人
一人足六人　横近習町
纏　壱人
角立四ツ目印
八町組高罷持　壱人
消口札持　壱人
水手　壱人
名主付　壱人
竪近習町纏持　壱人
一人足弐人
是は町年寄欠付人足八町組より差出し申候
出人足　合五拾人
定弐人足　百五拾七人
内百七人　鳶人足
残而　五拾人　出人足
此訳　拾三人　諸向欠付人足
拾六人　諸道具持出人足
拾三人　水手人足
八人　名主付
〆都合　五拾人
外二　抱鳶　五人
是は文久二戌年より八町出銀を以新規召抱申候
右は八町組火消人足并水手諸道具持人足取調候処書面之通御座候以
上　元治年子五月　八町組
八日町名主
惣太夫

御町年寄所

〔二四〕『八町定式札高覚』

一三拾枚内
　但拾壱枚　出人足
　　拾九枚　賃銀

柳　町
　五枚　町年寄
　壱枚　名主付
　壱枚　八日町御門欠付
　弐枚　水手
　壱枚　釣瓶持
　拾九枚　賃銀出

一弐拾四枚内
　但七枚　出人足
　　十七枚賃銀出

八日町
　五枚　町年寄付
　壱枚　名主付
　壱枚　纏持
　十七枚　賃銀出

一弐拾弐枚内
　但四枚出人足
　　十八枚賃銀出

山田町
　壱枚　名主付
　壱枚　纏持
　弐枚　階子持
　十八枚　賃銀出

一七枚内
　但壱枚　出人足
　　六枚　賃銀出

立近習町
　壱枚　名主付
　六枚　賃銀出

一拾九枚内
　但六枚　出人足
　　十三枚賃銀出

横近習町
　壱枚　名主付
　〃　纏持
　〃　八丁組高罷持
　〃　消口札持
　〃　水手
　〃　立近習町

一弐拾枚内
　但弐枚　人足
　　十八枚賃銀出

一弐拾壱枚内
　但九枚　出人足
　　十二枚賃銀出

一拾四枚内
　但八枚出人足
　　六枚賃銀出

右寄　百五拾七枚
　　此訳
　一拾枚
　一八枚
　一七枚
　一壱枚
　一弐枚
　一壱枚
　一弐枚
　一拾三枚
　一百九枚
　一壱枚

十三枚　賃銀出

工　町
　三日町
　壱枚　名主付
　〃　八丁組高罷持
　〃　纏持
　六枚　水手
　十二枚　賃銀出

穴山町
　壱枚　名主付
　〃　纏持
　〃　釣瓶持
　四枚　水手
　六枚　賃銀出

町年寄
八丁名主
纏持
八日町御門番所欠付
階子持
消口札持
八丁組高罷持
竜土水高罷持
釣瓶持
水手
賃銀取
立近習外纏持

都合　百五拾七枚

一人足弐人　町年寄所八丁組分欠付
　是は年々盆暮拾五日頃山本様江渡ス
金百五拾九枚
　内五拾持出人足
就而百九拾八町割高

〔二五〕『八丁組鳶人足名前』

世話役年鳶　横近習町　柳町抱　亀　吉
大鳶　桶屋町　善四郎
同　下蓮雀町　吉五郎
サツ又　上一条町　太　助
階子　横近習町　仲兵衛　〆五人
　八日町抱
世話役年鳶　穴山町　又兵衛
同　三日町　新　助
大鳶　横近習町　久　八
同　同　卯兵衛
纏　同　久　蔵　〆五人
　三日町抱
世話役年鳶　穴山町　六　蔵
大鳶　三日町　由兵衛
長鳶　桶町　平　吉
サツ又　穴山町　仁兵衛
同　上一条町　七五郎　〆五人
　山田町抱
長鳶　三日町　喜　蔵
サツ又　同　勝　蔵
竜吐水　同　善　吉
同　上一条町　源兵衛
長鳶　横近習町　庄　吉　〆五人
　横近習町抱
世話役年鳶　横近習町　清兵衛
大鳶　金手町　太　助
同　工　町　源　助
同　横近習町　常　吉
同　同　与　八　〆五人
　工町抱
大鳶　次　助
長熊手　清　助
大鳶　政　蔵
サツ又　浜　吉
階　子　銀次郎　〆五人
　穴山町抱
大鳶　三日町　栄　助
同　勘右衛門
同　丈　助
竜吐水　定　吉　〆四人
　立近習町抱
大鳶　穴山町　伊　蔵
長熊手　桶屋町　藤次郎　〆弐人
　人数合三拾五人
　右は八丁組抱鳶人足名前如此御座候以上

〔二六〕享和三年（一八〇三）『覚』

一火消人足之儀延享元子年五月柳町八日町山田町三日町立近習町横近習町穴山町工町右八町より相願御聞届之上鳶之者召抱に相成同年外拾三町并上府之儀も右同様に相成申候八町組定式人足高百五拾七人之内百七人分当時抱鳶三拾人之賃銀に引相残五拾人出人足に相成申候尤此内諸向欠付

人足道具持等に引水之手と申働候人足拾三人に御座候十三町組定式人足高百七拾人之内九拾人分当時抱為三拾人之賃銀に引相残八拾人出人足に相成候是又諸向欠付道具持に引水之手人足三拾六人に御座候
上府中組定式人足高百五拾四人之内八拾弐人分当時抱為拾五人之賃銀に引相残七拾弐人出人足に相成候是又諸向欠付道具持等に引水之手人足三拾五人に御座候
右三組合水手人足八拾四人に御座候持物等之儀当時は相違仕候

亥七月　　町年寄

（甲府略志一五八頁）

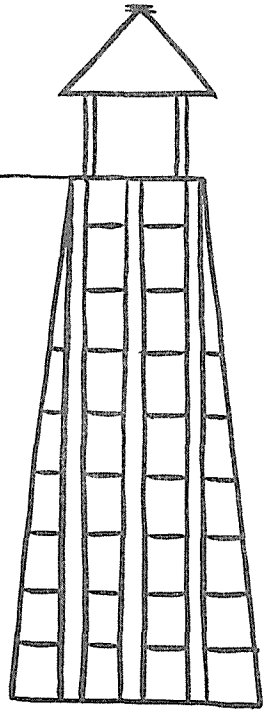
〔二七〕天保十二年（一八四一）『覚』

一御江戸火見櫓之儀は享保年中町御奉行大岡越前守様御支配之節町之火消壱組江壱ケ所宛被　仰付建始り風当り強場所ニ而は柱櫓ニ建来り其後寛政度松平越中守様御支配之節不用之場所修復行届兼立腐ニ相成候分取払被　仰付候然ル処壱組ニ而茂場所広所ニ而は其町限階子火見願上被　仰付候御当地之儀は
上様御物見被遊又ハ御鷹場多く依而建替修復之節は其場所ニ寄御届筋左之通

町御奉行所
新地御改方
本所方
御島見方
近辺御屋敷方

右之通御届致候事
町火見高サ三丈弐尺ニ限候所深川永代寺門前仲町壱ケ所地窪ニ付目先届兼候趣を以三丈六尺ニ願上御聞済ニ相成候由町火見ハ上ヲ行灯台と唱武家方ニ而は太鼓台と唱候由右之通承り候ニ付書記候事

天保十二丑年八月



〔二八〕寛文年『甲府夜番者口書留』

夜番覚

一城屋町　壱ケ所　一和田平町　壱ケ所
一下一条町　壱ケ所　一上一条町　弐ケ所
一金手町　弐ケ所　一伊勢町　弐ケ所
一工町　壱ケ所　一穴山町　壱ケ所
一魚町　壱ケ所　一八日町　三ケ所
一柳町　壱ケ所

〆夜番　拾六ケ所

〔二九〕城屋町夜番者口書

一昨二日晩あやしきもの番所通り申候哉と御尋ニ御座候拙者共義暮六ツ時分より番所へ罷出候へ共あやしきものは及見不申候せ中上もんは白キかたひし黒キはたを着刀をさし酒ニよいたる者ハ通り不申候哉と御尋ニ御座候左様成ものハ通り不申候若右御穿鑿之者通り申候而隠申候と脇より申出候は如何様之曲事ニも可被　仰付候以上

末六月三日

城屋町夜番者　李兵衛判
同　断　孫右衛門判

前書之通り夜番之者申上候義承申候

夜番李兵衛主人　市右衛門判
長人　次郎兵衛判

御奉行所

〔三〇〕延享三年（一七四六）町年寄口上書

町上水之儀何レ之御領知之節より初り申候哉御尋ニ御座候
町用水渡り候者文禄年中浅野弾正様同左京様御領知之節堀井戸に而者火之元用心に手支候故用水堰相渡り候段承伝候勿論町内迄御入用に而両側石垣に被遊堰筋御渡被下候段承伝候夫より三四年過候而堰蓋無之候而者往来通路悪敷御座候に付石蓋も御入用に而被遊被下候段是又承伝候夫より以後者町内之儀用水堰修復壱町切に町入用に而只今迄修復到来申候寛永十三子年より寛文元丑年迄廿六年之間平岡次郎右衛門様平岡勘三郎様御父子一国御奉行此節者御本丸ニ而御座候右に准御修復被遊被下候由承伝候夫より桜田御領（甲府家也）に罷成候砌新見但馬守様（家老）御出被遊細井治兵衛様御普請御奉行に而所々御普請御座候而用水筋堰筋も御入用に而御普請被遊被下候段是又書留に御座候其以后宝永二酉年松平美濃守様（柳沢家也）江相渡候而も桜田御領より御引渡御書送を以御入用に而御普請被遊被下候其以后松平甲斐守様御代にも右に准し御入用之場所者御入用に而御普請被遊被下候勿論町入用之場所者只今迄に至迄町入用に而年々致来申候惣而御掛替被下候節者入札を以式御入用に而請負人仕上申候御修復之節者手伝人足者町人足度に出申候御事
当地町方江相掛り候上水郭内迄之桶升等破損之節は前々は窺之上公儀御入用を以修復申付来候付此度修復之儀前々之趣を以御勘定奉行中江申達候処於江戸表上水御修復之儀武家方町方入用割合出金之事に候由殊に於当地は御用水一切無之全く町方用水に付江戸表之通割合申付可然残申来候依之御老中方江申上向後武家方町方入用を以普請申付候筈に相極候右割合武家方之儀も高割に而出銀有之候町方は小間弐間口を武家方高百石之積に相極め出銀之筈に候尤右割合江戸表同様之事に候条自今以后右之通相心得此度修復入用高之内右上水掛り候町方弐拾三町へ別紙書付之銀高割掛来卯正月廿九日迄之内取立差出候様水下町方名主共江可申渡候事

―甲府略志―

〔三一〕『覚』

一八日町御高札之儀火事有之節ははつし可申旨上一条町名主へ被　仰付候

〔三二〕『覚』

一町中出火之節火元へ猥ニ人集候与相聞へ候間火消人足之外又は火元近所ニ親類有ものハ格別其外火事場江一切集中間敷候若相背集候族有之におゐてハ急度召捕可申候
右之通町夫行宅ニ而惣町中江相触可被申候以上

未二月

〔三三〕元治元年（一八六四）『覚』

火消人足覚

一八町組抱鳶三拾五人出人足五拾人定式火札人足百五拾人拾三町組抱鳶三拾人出人足八拾人定式火札人足百七拾人上府中組抱鳶拾五人出人足七拾五人定式火札人足百五拾四人三組合鳶人足八拾人出人足弐百弐人
一御郭内より町方出火の節者町々より火消人足罷出消防仕候纏火消道具等者町により持参仕候尤御郭内抱火消鳶人足七拾弐人町方抱火消鳶人足八拾人有之其外水之手人足共罷出消防仕候

五

甲府御用日記文政八酉年

〔三四〕五月十四日

一例年之通立番自身番張番為致候町限増立番ハ道祖神祭礼当番之者壱丁目二丁目共ニ罷出此方ハ両人ニ而替ルゝ々相勤候

御廻り

御用人中御廻り町内御通行無之候

〔三五〕三月廿九日

一夜五ツ時過火事有之早鐘を打候ニ付罷出候処北山筋日朝村ニ出火有之候依之元城屋町出校迄被越候無程相鎮候ニ付引取申候

〔三六〕四月二日

一明三日例年之通火防祭之趣申被渡を以町内家別為申触候尤御神酒銭志次第為相集候処四百九拾文有之候正教寺江遣し秋葉等江御神酒被差上候様申遣候

甲府御用日記　文政九年

〔三七〕三月八日

一夜四ツ時過早鐘を打候ニ付駈出し候処出火之躰も無之候得共厳敷早鐘を打候間竪近習町境町境迄罷越候処御役人中并同役爲之者共迄相詰候得共何事ニ出火有之候共不相知ニ付御役人中より鐘撞右衛門被召呼御尋有之候処竪近習町より少し東江かかり筋相見江候ニ付誓見合候得共弥筋も強く相見江た間早鐘を打候有之候然ニ何歟間違之儀ニ而も有之候哉之趣ニ候御役人中も御引取被成候

〔三八〕四月二日

一例年明三日火防祭ニ付町内重兵衛ニ為相触候尤例之通秋葉御神酒銭為相集候処四百八拾四文有之候紙江包正教寺江遣し候

〔三九〕五月三日

一同夜九ツ時過之頃火事有之候趣ニ而相騒候ニ付駈出し候処上一条町与申者より出火いたし東西并向側類焼いたし候尤家数凡廿壱弐軒も焼失いたし候其節坂田与一郎殿火事取調之儀金手町名主宅ニ而致候趣ニ候得とも右名主も事騒も不致上一条町名主之類焼同様下一条町は病気不参之由ニ候間二三町ニ申合諸事省略致遣す呉候様被御聞候ニ付横近習町御役江右之段申談会所に罷越申渡いたし候尤此方并善左衛門十郎兵衛市之丞与助等右衛門兵衛罷越候

五月四日

一昨夜火事有之候ニ付立番自身番出候

〔四〇〕九月二日

一同夜八ツ時前火事有之候ニ付御目付屋敷江欠付金手町同道ニ而御立関江罷出八丁組三日町名主助左衛門十三丁組金手町名主武兵衛与申手札差出火事有之ニ付人足召連御堅〆ニ罷出候段申上候出火は何方ニ候哉之旨被相尋候ニ付大方板垣村ニも候哉又城屋町ニも可有御座分哉職分に相知れ不申候得とも右之様子ニ相見候旨申上御門前ニ相詰被有候間御用御座候ハハ被召呼候様申上御門前ニ罷居候

八丁組爲　三人　三日町纏持　壱人　同高罷持　壱人
同名主付　壱人　十三丁組爲　三人　金手町高罷持　壱人
同名主付　壱人

右之者共召連一同御門前に相詰居候

御目付様火事場江御出馬有之候

御玄関江被召呼候ニ付金手町同役同道ニ而罷出候処御用人中ニ候哉被仰聞候は鎮火ニも相成候ハハ為引取候様旦那出馬已前被御置候最早相鎮候様ニも相見江候間勝手次第引取候様被御聞候ニ付一同召連引取申候

一今夜出火場所江与助罷越板垣村ニ而家数二十軒にも及側ニ而焼失いたし城屋町境ニ而消防いたし候町方江は一図相懸り不申候

〔四一〕九月廿八日

一上下府中同役一同山本金左衛門殿江可参様一昨日廻状を以御達有之候ニ

付罷越候金左衛門殿与一郎立会ニ而定例之通火之元御触書為読有之候別
請御差出候
九月廿九日
一町内上組家持并小借屋とも被呼火之元御書付為読聞上組家持請御取之候
〔四二〕十一月八日
一暮六ッ時過八日町久兵衛裏ニ出火有之候尤物置より出火いたし七蔵仮屋
根弐ツ焼失外ニ類焼無之候
同町壱丁目藤右衛門向座敷に御役人中方御寄被成火元之御吟味有之向三
軒両隣并番役名主ともニ御吟味有之口書御取被成候今夜之火事之節折悪
敷風烈ニ候得共蔦人足其外之者誠ニ出精致候ニ付小火ニ而相済候
〔四三〕十二月三日
一蔦之者并其外共都合拾三人一同御白洲江御呼出　筑後守様御出座銘々名
前御呼被遊其方共義去月廿八日夜八日町出火之節早速欠付出精いたし消
防致タ段奇特ニ付褒美として青銅三貫文遣候尚又此上出精致セ差添候者
も申渡タ趣心得にと被仰渡候
甲府御用日記　文政十二年
〔四四〕一月十三日
一同夜立番自身番届ニ参り候砌今晩之町内ニ火数茂多ク人通りも繁候忍ひ
御廻りも有之候間出張相勤候様申渡候
〔四五〕四月二日
一明三日定例火防祭ニ付利助を以町内家別為相触候尤神酒銭為相集候所四
百弐拾文有之候ニ付正教寺間持遣シ秋葉に御神酒被差上御祈禱被成候様
申遣候
甲府御用留　文政十三年
〔四六〕六月二二日
兵部郷殿御病気之処御養生不被相叶去ル十九日逝去ニ付同日より普請者
三日唱物者七日停止之事
右之趣町中不残様可相触者也
寅六月　山城　町年寄江
右之通御書付を以被仰渡候間被得其意諸事相慎此節別而火之元入念自身
番立番差置之無断絶相廻火之元可被申付候尤町内ニ有之寺社方江も通達
可有之候且加勤方町廻り有之候此書付被致印形早々相廻留より与一郎方
江可被相返候以上
町　年　寄
〔四七〕十一月一日
一町中天水桶差出候様可被申付候
一竈改之儀例年之通各并上組共家別ニ相廻り入念銘々相改来ル十五日長次
郎方江可被相届候
一折々風立候節は火之元御気遣ニ被思召候間先達而被　仰渡候通自身番立
番無油断相廻り火之元入念候様可被申付候風吹候節は草ほしの類不焚様
可被申付候木綿ほかし場ニ而煙草火鉢差置候儀決而無用ニ可致候是又可
被申付候独身之者私用ニ罷出候節は隣家江為相知留守之家内火之元心付
候様可被申付候
町　年　寄
御用留　天保二年
〔四八〕七月九日
一先達而申渡通火之元随分入念様可申付事
一盆中燈籠之火廉末無之様可致事
一花火並撲躍等堅停止之事
一盆中夜番之儀増人を以例之通可相心得事
右之趣町中不残様可相触者也
寅七月　紀伊　山城　江町年寄
御用留　天保八年
〔四九〕八月二五日
阿部遠江守（甲府勤番支配、筆者注）明廿六日江戸出立同廿八日勝沼駅

泊同廿九日当宿江到着候間諸事先例之通可相心得候尤此節火之元入念可被申付候

右之趣町中不洩様可相触者也

伊　勢　　町年寄江

六

〔五〇〕宝永二年（一七〇五）甲府町方宝永条目

一火事喧嘩其外不依何事不慮之儀出有之は早速住（注進カ）を可仕事（第十四条）

一城下火事出来之節之儀兼而従差図其下知に随べし惣而常々火之用心五人組切に致吟味大切に可仕候若火事出来候はば前により有来候通町火消火消道具持て早速火元へ欠（付カ）け火消可申候且又不参のものの儀家業等にて申訳有之ものは格別子細なくして不参之者有之ば可為曲事事

附野火付け申間敷旨童部下々迄兼而可申付候若焼候はば早速欠付火消可申事（第十五条）

〔五一〕元禄七年（一六九四）御料御代官所名主五人組御定書

一火事出来申候はば御中之もの火消道具を持かけつけ精を出し消可申候若不出合もの有之候はば御せんさくの上曲事に可被　仰付候事

〔五二〕享保十六年（一七三一）甲斐国北都留郡巌村御条目

一村の火の用心常々五人組切吟味致し無油断念入可申候自然火事出来候はば家により手桶梯子等持出し何方にても早々火元へ駈付け火を消可申候勿論御年貢米念入郷蔵大切に囲可申候（第四十四条）

一従古来郷中メリ能所番所を立て夜人二人宛付置火の用心相勤自然不審成者見出候はば急度相改可申事（第四十五条）

〔五三〕延享四年（一七四七）御料所五人組前書

一村々におゐて万一御蔵近所に火事致出来候はば村中之者共火消道具を持早速駈着消可申候若致油断駈着不申候はば急度吟味之上越度に可申付候勿論米焼失致候歟又は不足いたし候はば村中として急度弁納可申候事

附郷蔵番人之儀村中吟味之上慥成者を撰昼夜無油断附置可申候尤風雨之節は名主組頭も替り替り御蔵見廻可申候破損等も有之候歟又は漏杯等候はば入念繕可申候并御蔵近所におゐてたばこ一切為呑申間敷候事

一村之内に火事出来候節は早速火元江駈着大火に不成内に随分精を出し消可申候縦他村に而も隣村之儀は互に駈着消可申候其節少之物に而も盗取候歟又は沙汰なしに拾物等いたし後日に相聞候はば急度曲事に可申付候事

附火事盗人殺害人其外何事によらず不慮之儀有之時は早速注進可申事

〔五四〕天保七年（一八三六）山本大膳五人組帳

一花火之儀家込之場所者不及申海手又者川筋に而も大造之花火流星相図之火同様之花火建申間敷若相背候はば急度可申付事

〔五五〕寛文五年（一六六五）上野村差上申五人組一札之事

一村中之火事出来候刻手前之家さしおき人別に手桶を持参仕御蔵かこひ可申候事

〔五六〕享保十年（一七二五）十島村五人組御仕置帳

一殺害人或は致自害候者或は倒者有之は番人を附置早速可訴出候火事盗賊喧嘩手負之者惣て不慮成儀出来候は右同前無油断可致注進事

一村中申合番屋を造番人附置火の用心随分入念可申付若出火有之は声を立村中打寄消防可致候勿論御年貢米入置候蔵大切に囲可申事

附風烈之時分は不限昼夜に切々相巡り用心可仕候近在出候はば早速欠付防之可申事

〔五七〕明治元年（一八六八）甲斐国御法度書

一御年貢米入置候節は御蔵番昼夜無油断相守別而火之元入念火災盗難無之様可仕候若等閑故障有之候はば番人は不及申村役人迄可為越度尤御用之置米御蔵より出候節は名主壱人に而封印切申間敷村役人立会之上開閉可

仕事

一村中申合火之番相立随分入念可申候若火事有之ば火消道具を持早速駈付ケ火を消すべし出火又は盗賊等有之節声鳴物立候はば村中之者不残罷出相防べし若其場へ不出合者有之ば村役人急度可遂詮議且火事場其外孰れの所にても金銀諸品拾ひ取候はば早々御役所へ可訴出若隠置脇より相知れ候はば可為曲事事

〔五八〕享保十年（一七二五）五人組前書

一村中申合番屋を造り番人附置き火之用心随分入念可申付若し出火有之は声を立て村中打寄り消防可致候勿論御年貢米入れ置候蔵大切に囲ひ可申事

附風烈の時分は不限昼夜に切々相廻り用心可仕候近在出火候はば早速欠付防之可申事

一洪水の時堤川除囲ひ候節又は盗人狼籍者並火事有之ば鳴を立て候節村中之者十五才以上六十才以下の男は不残可出合若し場所へ不出合者あらば名主長百姓より可遂詮議事

〔五九〕寛文五年（一六六五）五人組定

一火のまハり昼夜無油断可申付事

附五人組上組ニ而月番をいたし公用并可申候

註〔五〇〕穂積重遠編、五人組法規集、続編上、四六四頁
〔五一〕同　右　一四七頁
〔五二〕同　右　六九〇頁
〔五三〕同　右　五人組法規集　二二三頁
〔五四〕同　右　四六九頁
〔五五〕竹川義徳著　山梨県下に於ける五人組制度の実証　三七頁
〔五六〕同　右　五一頁
〔五七〕同　右　八二頁、八五頁
〔五八〕穂積陳重編　五人組制度論、一九九頁
〔五八〕坂田家　古券集　収録

七

〔六〇〕享保三年（一七一八）十月十八日

火消役江申渡候書付写

町中出火之節向後ハ火元近所之町より人数差出し消候筈ニ候町人数消しかかり候所江定火消相越候共町人数其儘差置消させ可申候尤あらそひ候儀無之様ニ組之者家来江堅可申付事

一火消三人数少きも有之由相聞候左様ニハ有之間敷事ニ候程も可有之事ニ候程も可有之事ニ候不足ニ無之様ニ相応可相連候

〔六一〕寛政四年（一七九二）二月六日

町方大火之節ハ定火消人数相掛り其余ハ相掛り不申事

京極備前守殿御渡　御目付江

当時町方出火之節、定火消人数相掛り候得共、何分出精消防不致ニ付、町火消而已相掛り候様致度旨、町々名主共相歎候趣ニ候、以来風烈大火之節ハ、定火消人数相掛り可申候、其余之分ハ、定火消方掛り不申候間出精消防致候様可被申渡候

〔六二〕享保三年（一七一八）九月『覚』

消防心得之事

風烈候節、町々ニ而商売物道具等仕廻候程之節、若町内方ニ而出火出来候ハヽ、其所より風上弐町、風脇左右弐町宛都合六町、壱町之出人三拾人宛ニ極メ、早速欠付消留メ可申候、小屋杯之類ハ引壊テ消留可申、兼而有合候階子鳶口細引等手近キ所ニ指置き、出火之場所江可持出候、惣而火消道具新規ニ拵候ニハ及間敷候、尤風烈之節は、町方高売も不罷在候儀ニ候得ハ、欠付遅参候ハヽ、吟味之上急度可申付候、為其、与力同心是又早速場所に指出、羅出候町人共を為相改可申候

一風吹不申節も右之通心得、居合候者欠付候様ニ可仕候、然共常々ハ商売等ニも罷出候儀ニ候之間、壱町より定候三拾人難出節も有合候者ハ可差出候、併五六人より減候ハヽ、是又吟味之上急度可申付候、尤此節も同心指出為改可申候

一出火之場所ニ而消掛り鎮寄候共、火消参候ハハ、右人数上ケさせ、町人も其儘ニ罷在、とともとも消シ、大火に不成様ニ可仕候、但、右之節何分之儀有之候共、論し合不申、消候事第一ニ可仕候、其分ニ難成儀ハ、重而奉行所江訴出可申候

一町方より掛り候階子よりも火消上り下り致候共、尤論し合申間敷候、火急ニ而外に階子無之時ハ、火消掛候階子よりも下り候、様ニ可仕候此段火消之面々に申渡候

一水之手之儀は井戸不足之所ハ火消江も申課候之間、論合不申、直ニ扱候様可仕候

一壱町より人数目印之ため、有合候小のほり、夜中ハ挑燈持出候様可仕候

一欠付人数之内江、諸事世話やき之ため、名主月行事一所に罷越可申候

〔六三〕享保十三申年（一七二八）

甲府出火之節住宅致類焼候勤番之者共甲州江引越無間も類焼ニ付拝借被仰付候御書付

去来十二月九日之夜、甲府出火之節、住宅致焼失候勤番之者共、甲州江引越、無間も類焼仕候ニ付、拝借金被仰付候

三百石より五百石迄　金三拾両
弐百石但、有余共　金弐拾両
三拾俵　金五両
拾五俵より弐拾俵迄　金三両
拾五俵以下　金弐両

右之通拝借被仰付之候、上納之儀ハ甲州江引越候ニ付被御付候、拝借金返納相済候翌年より五ケ年賦ニ上納可仕候

一御役料並御扶持方ハ高割ニ除之

右之趣、甲府勤番支配江申渡候間、相談、拝借金可渡旨、奥野忠兵衛方江可被申越候

申四月

〔六四〕寛保三年（一七四三）十二月御仕置之例

乱心ニ而火を附候女咎之事

甲州蔵田村
金右衛門娘
は　つ

此はつ儀、五年以前致乱、心処本性ニ成、甲府勤番佐々井仁右衛門方ニ勤候処、火事有之候得ハ、人々騒キ候事不斗面白自存、夜中木綿切レニ火を包、仁右衛門居宅庇并葭垣等江四度迄挿置、煙臭キ度々、主人并傍輩共江為知候、然共、燃付程之事ニハ無之、盗色欲之筋、又ハ家内江遺恨を含候儀ニも無之、狂気ニ無紛旨、甲府勤番支配相伺御差図

当分牢内ニ差置、親金右門咎差免候上、金右衛門并金右衛門弟彦兵衛江相渡、押込置候様可申付旨被仰渡候事

〔六五〕出火ニ付而之咎之事

一平日出火之節

小間拾間より以上焼失ニ候ハハ
享保六年極　類焼之多少ニより三十日廿日十日
火　元　押　込

寛保三年極

但、小間拾間以下之焼失ニ候ハ不及咎、尤寺社より出火ニ而、類焼有之候ハハ、其寺社七日遠慮

一御成日朝より還御迄之間并小菅、御殿、御成、還御之日并、御逗留中小間拾間以上焼失、且平日三町より以上焼失之節

享保四年極
火　元　五十日手鎖

寛保三年極

但、寺社より出火ニ候ハハ、其寺社十日遠慮

寛保二年極
火元之
地　主　三十日押込

同　火元之　家主　三十日押込

同　火元之　月行事　三十日押込

同　火元之　五人組　二十日押込

寛保二年極

風上弐町風脇左右弐町宛

六町之月行事　三十日押込

但、風上風脇之もの共、不精之様子次第、相応咎之可申付候

格別精出候ハハ、誉可申候　（以下略）

〔六六〕火附御仕置之事

従前々之例

一火を附候もの　火罪

寛保二年極

一人に被類、火を附候もの　死罪

従前々之例

但、頼候もの　火罪

享保八年極

一物取にて火を附候もの、引廻之儀

日本橋　両国橋　四谷御門外

赤坂御門外　昌平橋外

右之分、引廻通候節、人数不依多少、科書之捨札建置可申候、尤火を附候所居所町中引廻之上、火罪申付事

但、捨札は、三十日建置可申候

享保九年極

一物取ニ而無之火附、不及捨札、火を附候所居所町中引廻之上、火罪可申付事

享保八年極

右火罪御仕置、都而晒に不及事

追加、享保七年極

一火附を召捕、又は訴人に出候もの　御褒美　人数之不依多少銀三拾枚

追加　延享二年極

一火を附候もの、年を越、顕におゐてハ　死罪

〔六七〕享保度法律類寄『火附』

一意趣慾心にて火を付、又は人に附させ候もの、被頼候て附候者、十六才以上は総て火罪、十五才迄は流、罪旧悪の火附、乱気にて火を附候ものは死罪

一物取の外火を附、不燃立候は引廻し死罪、火札張候者は三日晒死罪、被頼火札を書候もの、火を可附心底にて火道具致懐中候者流罪

〔六八〕赦律『附火てたし候もの之事』

一幼年ニ而無思慮附火いたし遠島ニ相成候ものハ、拾六ヶ年以上赦免可申付、幼年ニ候とも、遺恨又ハ盗為可致仕成候類ハ、赦免難成、其余大人愚昧之附火等ハ、赦免難成事

〔六九〕宝暦二年（一七五二）正月廿九日幕令

近来火事場に見物ヶ間敷者別而多馬上に而も出候様子に相聞候向後堅可為無用候右体之者見請候はば其場へ出候御目付御使番相改姓名承糺申出候様申渡置候事

〔七〇〕正保三年（一六四六）幕令

火事之節可見舞親戚、親子、兄弟、舅、小舅、伯叔父母、甥姪、祖父母従弟、聟

〔七一〕明治三年（一八七〇）九月晦日

坊間失火ヲ警ムル令ニ日

火ノ元ノ儀前々モ相触候通平日心附失火無之様致シ十月朔日ヨリ翌春三月晦日迄町々自身番差置昼夜無油断相廻り可申尤風烈ノ節ハ別テ銘々入念一際大切ニ心付可申事

右ノ通市中末々迄不洩様可触知者也

庚午九月晦日　甲府県庁

町年寄へ

〔七二〕天保十三年（一八四二）市中取締類集

一町火消人足頭取共儀、組合突合と号、喧嘩口論、見廻・祝儀・仏事等互ニ往来致し、其程ニ応し音物等取遣致し、終ニハ諸雑費相嵩候故、給分之前借又ハ合力等、町々江申出、及断候得は、出火場其外共不情致し候間、無拠申聞候通り致し遣候故、自然町入用も相嵩、地主共ハ別而難渋致し候間、右躰突合之儀ハ都而相止、其身持前之組合人足共取締致し、給分之外突合金等町々江為差出迷惑不相掛様、御沙汰も御座候ハバ一統難有旨申居候

〔七三〕同　前

一近来火事繁相成、米銭古書物旧記等、年々焼失致し候類広太之儀ニ而難計、風烈之折柄大火および候得は、人命を傷ひ候儀も不少、当時第一之凶災ニ御座候、火之元大切ニ相守可申儀は時々御触有之、別而冬春は人々相慎候事勿論ニ御座候得共、及手過候義は、一二は軽き者共之、片時もなくて不叶火之恩徳を忘れ、麁略ニ心得候義全不断ニ馴候故之過ニ而、仮令町役人共如何程制当仕候ヘハとて、人々精々相守不申候而ハ無詮儀ニ相成申候、たとへハ一図ニ火之元相守慎候共、不慮之過又ハ賊之付火ニ逢候杯能々惶レ慎候上ニも猶守防之不届場所有之、ましてや火を麁末ニ仕候ものの過チ致候儀は、尤も可有之奉存候、水火之恩を深く不存者も、金銭之如く大切ニ仕候ハバ、少しハ火難之為ニ相成可申哉ニ奉存候

是迄出火跡火元取調候節、当人共江実否承候得は、多ハ寒夜ニ老人等之絶兼候間、あんかと唱候火鉢を裾江入置、あたたまり心能寝入候得は、不思踏返し、夫より火移り事ニ相成候類、実ニ老人之強く冷へ候間、火気無之候而ハ、寝兼候ハ尤之儀ニて、其子孫等之老人持候ハハ、深夜ニ候共刻々見廻り介抱いたし、敢而火之元之為而已ニ不限、左程之事ハいたわり可遣儀ニ御座候、全其家壮年之孫子共之越度ニ御座候、且又賭事ニ耽り候若者之悪党共、寒気を防候衣類も無之候迚、心柄難儀仕候儀は不思、近辺塀垣根等之立木を盗来り、世間を不憚焚火致し、或は臥り候節あんか火鉢を抱キ、終ニは大事ニ及び候不法之者共も御座候、老人とは格別ニ而、左様之徒者ハ厳敷御制当被下置候様仕度、其外武家方中間部屋等ニも多相見江申候

一風烈之節、軽き者共之夫婦暮抔ニて、亭主ハ稼ニ罷出候、後妻老人ニ而食事時ニ竈を焚候儘、菜之物調へ候とて隣家をも不頼出行、留守ニ焚捨有之火より及出火候事、乍併軽キ身分ニは留守居ニ差置候ものも無之、一日食事も不仕、内ニ守居候儀も難相成儀ニは御座候得共、風烈之砌等は火之元入念相慎候上、若要用ニ而罷出候ハハ、隣家をも能々相頼候歟、家主江其段相断候ハハ、他より心付方も可有之哉、曾被頼候ものの軽ニ心得違致候者も可有之候得共、是は持合之儀ニ而、能々心付遣し候様仕度

一味噌薪之類入置候雑物蔵、或は物置等ニ差置候消炭・藁灰、都而火気を持候品ハ前方入念しめし置候而も起り返りかちニ御座候、是等ハ下人ニ而已締を不任置、其主人精々心付、別而冬春ハ時々見廻り心付候ハハ、下人迚も等閑ニは仕間敷候

一ふら挑灯、是ハ前々被仰渡も有之、甚あぶなき品ニ御座候、其外仏前江備候定香盤・線香、寺院方ハ人少く、堂塔都而広場ハ風透候間、風烈之節等ハ度々見廻り気を付候様仕度、在家ハ仏壇も手近之場所ニて心付方届キ候得共、定香盤差置候ハハ、夜分専用ニ心付申度、堂塔之外は無人之場所江火気差置候事甚危キ儀ニ御座候、市中ハ右之儀有之間敷様被仰付度

独身者等之稼ニ出、帰宅之程食事ニ差支候迚、冬ハ炬燵或は火鉢江炭

団等ヲ埋火ニ致し差置候類

一味噌屋・温飩屋・蕎麦切や・飴屋・豆腐屋・こんにやく屋・湯屋其外大火を焚候商売躰之者ハ、火之元相守候儀を職分ニいたし心付候得共、火取扱候家業故、過いたし候儀も間々有之、乍併余業之者と競候得は、却而大火を焚候渡世之者ハ火之元入念相慎申候

一大工・木具屋・建具屋、其外鉋屑・木切等火之移り安き品取扱候渡世筋は、是又過ありかちニ御座候、精々相守候様被仰付度

一夏秋ハ大凡蚊遣り火鉢より過致候儀ニ御座候、消炭・藁灰取扱候よりハ猶燃移り安ク、一入入念候様仕度

〔七四〕嘉永五年（一八五二）正月十五日『町触』の抜

火之元取締之儀ニ付町触

火之元之儀は大切之事ニ付、古来より追々町触申渡も有之、平日迚も格別ニ心付候は勿論、別而大風之節は猶更厳重ニ可心付筋緊要之儀ニ付、月番之奉行所より相触次第 風相止候迄は、 諸職諸商売共相休、他出不致、最早他行致候者ハ早々立帰り、火之元之一途を相守、火之番行事共江家主共壱両人加り、町抱人足召連、たへす町内を相廻り、火之元触歩行、名主は支配町々を見廻り心付候様可致、 尤右触出之候共、 風烈ニ而空之色変候程之儀ニ候ハハ、一同右同様相心得可申、且出火之節之心得并火之元心得方之儀は、条目書付を以触示し候間、木戸番屋表店は家毎、裏家之分は路次口江張置、精々厚相心得無油断相守可申旨、文政十三寅年触置候処、 程経候ニ付、 心得方相弛ミ等閑之町々も有之哉ニ相聞、不埒之至ニ候、以下略

〔七五〕嘉永五年（一八五二）正月『火之元掟』

一火之元鹿末ニ致候者は、早速地立店立可申付事

一風烈之節は町々ニ而御用之外は堅他出不致、火之元而已相守、屋根上庇したみ等江水打、有合之桶其外江水を汲ため置へき事

但、屋根上之防之ため梯子并水籠・水鉄砲等用意致置可申候

一平日も竈はいふニ不及、二階物置等も惣而目遠き場所はたへす見廻、夜中はねふし候節家内を改、消炭其外をとくと見届可申事

一湯屋を始おふ火を焚候渡世は猶更、建具屋・舂米屋はかんな屑・わら灰等、并わら商売之者は其品別而可心付事

一ふら挑灯与唱候品より度々出火致候儀有之候間、用ひ候度毎入念しめし可申事

一普請小屋は昼夜無油断見廻、其外河岸地物置等は別而心付可申事

一手あやまち致し火もちへ立候ハハ、畳にておふひ消可申、尤声を立近所江しらせ可申事

一出火有之候ハハ、屋根上其外飛火之防第一ニ致へし、己来遠方より之出火ニ而飛火致、夫より焼つのり候ハし、火元与同罪たるへき事

一出火致屋根上江もへ抜ケ、又は飛火ニ而もへ立候節、近所之者共早速打消候ハハ、其町内隣町より其者共江格別之褒美可遣事

但、右出銀手当は地主共并表店之者共申合、常々積置可申候、尤次第ニ寄月番之番所江訴出可申、時宜ニ寄褒美も為取可申候

一火之番行事は、町内を度々見廻り可申事

一風烈之節は名主も支配内見廻り、火之元怠さる様可申付事

一平日水溜桶用意致、水かわかさる様たへす汲入置可事

一名主共組合之内弐三人ツヽ申合、常に支配内火之元等互ニ心付、軒近き所江火所を拵其外火之元不用心ニ相見候所は、名主共見廻直させ可申事

朱書『追加』

一風烈之節無拠儀ニ而他行等致候節は、家主江相届可申、独身之者は家主より火之元改を請候而可罷出候

一裏家店借之者共は勿論、表店住居之者も相加り、五人三人ツヽ組合を立置、組合内相互ニ火之元心付合可申候

右之条々急度可相守、相背候ハし罪科たるへきもの也

子正月

註

〔六〇〕 徳川禁令考　前集第三、四〇二頁
〔六一〕 同　右　〃　四〇五頁
〔六二〕 同　右　〃　四一六頁
〔六三〕 同　右　前集第四　八一頁
〔六四〕 同　右　後集第四　三七〇頁
〔六五〕 同　右　後集第三　三七三頁
〔六六〕 同　右　別　巻　一〇八頁
〔六七〕 同　右　〃　二頁
〔六八〕 同　右　〃　二七四頁
〔六九〕 江戸の花　三三頁
〔七〇〕 同　右　三三頁
〔七一〕 山梨県史　第二巻　三四七頁
〔七二〕 大日本近世史料・市中取締類集一、五二頁
〔七三〕 同　右　一、三三九頁
〔七四〕 同　右　三、一〇一頁
〔七五〕 同　右　三、一〇三頁

追　而

(1) 史料提供等本研究にいつもながらの御協力を賜りました、県立図書館郷土史料室の各位に乍未筆、深甚なる謝意を表します。

(2) 近世甲斐法制の研究のうち、まず、主として、甲府の町方法制の、史料の調査・研究を進行中であります。第一回「甲府の町年寄」（県立女子短大紀要第一号）第二回「甲府の町火消と警火の制」の発表につづいて、次回は、甲府町内の警備、防犯、刑事事件等を中心にしつつ町内治安の問題の史料を集成する予定であります。

筆者は、本学助教授、法制史学会所属

（昭和四三、一、一〇）